

本邦ケインズ学の貧困

—『ケインズ 100の名言』の迷言の起点となった『雇用・利子および貨幣の一般理論』の誤訳

(上)

米 倉 茂

はじめに

I 「はじめに」から捏造されたケインズ像―ケインズと比較する相手の取り違え	99
II 改竄された英国の再建金本位制の成立・崩壊の過程	101
III とんだ『雇用・利子および貨幣の一般理論』解題	104
(i) 『一般理論』における名言を台無しにする切断行為	104
(ii) 「壺」をはずした「アニマル・スピリッツ」の惨状―「美人投票」の顛末	106
(iii) 「流動性のわな」にはまった「流動性選好」	109
IV とんだマルクス・レーニン評言	111
(i) ケインズに名を借りた「レーニン主義」の転倒	111
(ii) ケインズに名を借りた『資本論』によるコラーン抹殺	113
V 忘却の彼方と化したケインズの戦後通貨構想	116
(i) 「流動性のわな」ならぬマウス・トラップにはまった悲劇	116

(ii)	銀行原理も理解できないまま清算同盟案を解題……………	127
(iii)	かき消されてしまったケインズ・ロバートソン論争の佳境……………	135
VI	猛威をふるうケインズ・ハザード—玄人投資家ケインズの手口を理解できない「投機家」の登場……………	138
VII	一〇〇番目の「名言」を飾るに相応しい「終焉」—迷言に始まり迷言に終わった『ケインズ 100の名言』……………	146
	以右が(上)	
VIII	ケインズの深層心理を読み切っていた反ケインズ学者—西部邁に残された課題……………	
IX	誤訳で塗り固められた『一般理論』第12章 長期期待の状態……………	
(i)	利子率による「予想収益の資本化」の「予想収益」の不明さ……………	
(ii)	第四節の誤訳の露天掘り……………	
(iii)	台無しにされた美人投票方式の投資……………	
(iv)	「信用の状態」を理解できない信用論・景気循環論……………	
(v)	「企業」を死に追いやる投資論—再び飛び出すキャピタルゲインへの無理解……………	
(vi)	英米の証券市場比較がサッパリできない比較論……………	
むすび		
付録	京都大学経済学博士号審査の実態調査報告……………	
	京都大学における経済学博士誕生の顛末……………	
参照文献		

はじめに

「一段のバランスシート調整が予想される」。これは近年、国際金融市場を震撼させていたサブプライムローン問題に限らない。学問の資質が問われる「ケインズ学者」のレベルを張った商品も同じこと。サブプライムローン問題では、根拠もなく高格付けされた金融加工商品が暴落し値もつかない状況に陥った。これとまさしく同じ状況。それが今回のケインズ劇場に登場する日本の「ケインズ学者」の「偽装」の内実なのである。

ケインズの生誕百周年が一九八三年。同年末、それにあわせて『雇用・利子および貨幣の一般理論』も再訳された（東洋経済新報社から。訳者は塩野谷祐一）。再訳されたからには最初の訳（訳者は同じ塩野谷祐一の父の塩野谷九十九）よりも正確にわかりやすい日本語になっているはず。ところが実際はその反対である。

今回の拙稿が本論で詳細に明らかにするとおり、塩野谷訳はデータラの限りを尽くしている。特に「美人投票」でよく引き合いにされる「第一二章 長期期待の状態」は肝心の箇所が全部まちがっている。およそ証券市場論を理解していないのである。

筆者はこの間、「ケインズ学者」の退嬰ぶりを詳述してきた。それは金融学会の全国大会でも衝撃的に明らかにされた（二〇〇六年一〇月、大阪大学）。ケインズの人生のクライマックスをなすブレトンウッズ協議前後におけるケインズの役割が何も理解されていないことが、ケインズ全集の翻訳のデータラメさ（具体的には第二四、二六巻）に示された。筆者はこのことはケインズ学者が『一般理論』の訓詁学に専念するあまり、実際のケインズの動向を探るエネルギーを欠いたためであると考えてきた。

筆者のこの解釈は実は好意的すぎる思いこみであった。今回初めて知った。「ケインズ学者」は『一般理論』の訓詁学さえもまともにできないことを。なぜなら、塩野谷祐一訳の『一般理論』が、大問題であるという指摘を「ケ

インズ学者」が行ってきたという情報はこの二〇年間以上、伝わっていない。

一方にはケインズを冠した質の低い大量の研究、他方では無思慮なケインズ像の捏造。これが引き起こすケインズ研究分野の底知れぬ災い。ケインズの実像と捏造の大きな乖離。これが表面化することなく意識されることもなく現在にまで至る。それが日本のケインズ研究の実態なのである。これではケインズが遠い過去の中に消え去ってしまう。ブレトンウッズ協議、対米金融協議、大英帝国の崩壊などの時代の激流に翻弄されるケインズの苦悩も忘却されてしまうのである。

しかし何時までも、捏造で塗り固められた「古き良き時代」の追憶に耽るわけにいかない。今回、その問題を改めて浮彫にする材料が飛び出した。それがここで取りあげる『ケインズ 100の名言』である（平井俊顕著、東洋経済新報社、二〇〇七年）

あらかじめ指摘しておく。日曜大工なみの作品。どこに釘を打って家を建てるのか、あるいは足の踏み場はどこなのか？　これがさっぱりわからないままに家を建てようとする家はトランプ・ハウスのごとく崩壊し、大工も組み場から滑り落ちてしまう。そういう読後感を抱くのが『ケインズ 100の名言』の内実だろう。

史眼を欠いた視点の産物。史実によらない話をする虚構の積み重ねとなる。その結果、可能性に充ち満ちていたはずのケインズ研究に深い汚点、暗く重い影を落としてしまう。それも無理はない。『ケインズ 100の名言』の著者は『一般理論』の翻訳が誤訳で塗り固められていた事実さえ気がつかずに、『100の名言』を解説しているのである。

ケインズ学者の第一人者と称される学者の驚くべき実像。次々と明らかにされる仰天動地の学問的資質の実態の数々。ケインズ学を錦の旗としつつも、実は学問の姿勢とは対極の世界のブラックホールに棲息する日本の

「ケインズ学者」。その典型例が『ケインズ 100の名言』であり、その淵源は『一般理論』の翻訳にある。それを明らかにするのが今回の本稿である。学問上、『100の名言』ならぬ、110番の、まさしく背筋の寒くなる話をしてみよう。

I 「はじめに」から捏造されたケインズ像―ケインズと比較する相手の取り違え

迂闊にも、『ケインズ 100の名言』の著者はケインズの肝心の点はまったく知らないことを自己暴露する。附録の年表（ix）によれば「1945」年、「9」月、「アメリカとの借款交渉」となっている。こう書いてしまうと平井はケインズを無能な対米金融交渉者として描くことになることに気づかなければならない。

これは平井の不注意によるものでない。平井はケインズが本場に「借款交渉」を目的として英米金融協定の交渉に向かったと思いきんでいるのである。それを示すのが次の記述である。ケインズの「英米相互援助協定―一九四二年二月に続く」主要な仕事は、一九四五年一月二月に『英米金融協定』として結実することになるアメリカとの借款交渉であった」（二七頁）と書いているが、「英米金融協定」は「アメリカとの借款交渉」でなく、「アメリカとの援助獲得交渉」だった。ケインズは八〇億ドルの無償援助を獲得するために対米金融交渉に臨んだのである。しかし、実際の「結実」においては無償援助は零だった。その代わりすずめの涙にしかない借款を、しかも大英帝国の解体を迫られる非常に厳しい条件で、受け入れさせられた（同年二月）。だからこの対米金融交渉の土壇場で英国政府はケインズを英国首席交渉者の地位から実質上、解任している。

このような事情にも不明な、浅はかな知識で平井はケインズの人物像を語る企画にとりかかる。その野心には恐れ入る。そのため、当然のことながら、平井は『100の名言』にかかる前から躓いてしまう。

それは著書の「はじめに」のところである。ブレトンウッズ協議の前段階のアトランティック会議（一九四四年六月）におけるロビンズからの日記の訳出である。ロビンズはケインズとも国際通貨体制の構築をめぐる対米協議におもむいている。彼の同年六月二四日の日記を平井は次のように訳出しているが、内容上、完全に間違っている。

……ケインズの特別の才能はそのすべて「雄大さにまで高められたわが人種の伝統的な特性」の埒外にある。彼が、我々の生活や限度という伝統的な様式をつかつているのは確かであるが、それは伝統的ではないものを抱えて^{ほとぼし}迸り出ている (iv)

この引用では平井はケインズと比べる相手を取り違えてしまった。平井の訳文にある、「雄大さにまで高められたわが人種の伝統的な特性」とは当時のチャーチル首相の「特性」のことであり、平井の訳文のような、「わが人種」一般の「伝統的な特性」ではない。いくら英国人がすぐれているといっても、そのすべての人の一般的特性が「雄大さにまで高められた」ものであるはずがない。そしてロビンズによれば、その「伝統的な特性」が「雄大さにまで高められた」チャーチルの「特性」を超えたものがケインズの特性であるというのである (S. Howson and Moggridge (ed.) ① 158)。

平井はケインズの特性と比較すべき対極の特性（チャーチル）を見失った訳文に終わったのである。

そして最初に指摘しておこう。ロビンズはケインズのことを、平井の引用のとおりには考えていない、むしろ逆の印象をもっている。一九四四年六月の時点ではケインズをこのように絶賛しているロビンズであるが、ブレトンウッズ協議ではIMF協定を誤解釈してしまったケインズのことを、「時に応じて両極端のことを主張する雄弁な主

導者であった」（〈Robbins〉193）と記している。実際、平井が名言番号27（ケインズ案とホワイト案）で紹介する清算同盟案（もちろん平井は何も理解していない）においても、ケインズは自由為替か為替管理の両極を右往左往していたのである（〈米倉二〇六〉一三二〜四〇）。

もちろん、平井はケインズの、このようなヤヌス的性格を以後の『名言』で何も紹介していない。たしかに、平井はケインズの思想の変化の歴史的経緯を詳述している。しかし、同時点において相反する考えを抱き続ける点は何ら紹介していない。ケインズのこの側面を語らないとケインズの人物像を語ったことにならないのであるが。

もちろん平井にそれを期待するのは無理がある。ローマによるカルタゴへの仕打ちになるからである。平井はケインズのことを「第二次世界大戦後の世界システムの構築に多大な貢献をなした」（iv）と主張しているが、実際にはその面で多くの問題点をさらけ出したと紹介しているのがモグリッジ、スキデルスキの浩瀚な『ケインズ伝』であることを承知していることがわける記述は一切ない。

では次に平井版『名言』を内容検索してみよう。幸いにして名言番号1は問題ない。当然である。ケインズの訳では定評のある早坂忠による『平和の経済的帰結』の訳文を参照しているからである。一方、平井自身が訳出したところには危険がいっぱいである。

II 改竄された英国の再建金本位制の成立・崩壊の過程

ケインズを語る場合、彼の再建金本位制に関する評価への言及は欠かせないはずであるが、平井はその点に暗い。それは名言番号9でハッキリする。

9 金本位制批判（一九二三年）

いまの金の価格は「人為的な」価値によっており、その将来の動きは、ほとんど完全にアメリカ合衆国の連邦準備局の政策にかかっている（四八頁）

これは『貨幣改革論』からのものであるが、原典は平井の挙げている JMK4, pp.134-5 ではなく、単に p.134 である。それはささいなことである。しかしこれを読んで一般の読者はケインズがなぜ金本位制を批判したのか、理解できる人はいないだろう。無理もない。平井は英国の再建金本位制の成立過程はおろか崩壊過程も知らないからである。

ケインズによる、金本位制批判でより強烈な、名言にふさわしい批評は、かのジャガーノートを引き合いにした話のほずである。インドの神クリシュナの山車であり、これにひき殺されると極楽往生できるという迷信がある。ケインズは『チャーチル氏の経済的帰結』（一九二五年）において、ジャガーノートを英国金本位制復帰にたとえ、その犠牲者として炭鉱労働者を例に挙げて金本位復帰を批判した。そこにおける主張の方が平井の先の引用より、はるかに鮮烈である。それを引用しよう。

炭鉱労働者たちは経済的ジャガーノートの生贄である。旧平価の四・八八ドルに戻るために四・四〇ドルと旧平価の間の「些細な溝」(moderate gap)を埋めようと切に願うシティの長老を満足させるために大蔵省とイングランド銀行が手がけた賃金切下げという「根本的調整」を身を挺して示したのが炭鉱労働者なのである。炭鉱労働者は（そして他の分野の人も同じ運命になるはずだが）、金本位制の安定を確保するために依然として必要とされる「些細な犠牲」(moderate sacrifice)なのである。炭鉱労働者の窮状はチャーチル氏の経済的帰結の最初のことであるが、我々が非常に幸運でない限り、その帰結の終わりではないのである。(JMK9, p.223)

実に巧みな修辭による批判である。ケインズは旧平価（四・八八ドル）での金本位復帰が過大評価であり、炭鉱労働者など英国の産業へ大きな圧迫を加え失業問題を悪化させていると強烈に批判した。その評価の是非はともかくも、世界的にあまりにも有名な批評である。

金本位制復帰に関する名言を挙げるとすればこれが有力な第一候補だろう。平井の「名言」は何が名言なのか非常に多くの解説を要するものである。おそらく平井はそれを解説できないだろう。なぜなら、平井は英国の金本位復帰、崩壊の過程を何も知らないからである。

その例を一つ一つ示しておく。英国金本位制が何時から危機に曝されていたのか、何も知らない。たとえば、「再建されたイギリスの金本位制はすぐに土台を揺さぶられることになった。それはニューヨークで起きた一九二八年半ば以降の株式市場における投機ブームに端を発している」（四八頁）という記述である。英国の金本位復帰は、平井の書いているとおり、一九二五年四月のことである。ところが平井によれば、その金本位制が「すぐに土台を揺さぶられる」のは、「一九二八年半ば以降」のニューヨーク株式ブームだそうである。

さて、二五年四月から三年以上もたっていることが、「すぐに土台を揺さぶられる」ことと言えるのだろうか？ 実は英国金本位制の危機はずっとそれ以前、一九二七年春、夏に訪れており、英米仏独中央銀行会議でひとまず危機が回避されている。もちろん平井はこの点にふれる知識は持ちあわせていない。

さらに驚くべき認識を平井は示してくれる。英国の再建金本位制は「アメリカからの借款に頼るかたちの通貨制度にすぎなかった」（四九頁）という。これは何をさしているのだろうか。おそらくケインズの『貨幣改革論』を一知半解に解釈したためであろう。

たしかに英国は二五年四月に金本位復帰した時、米国から二億ドルのクレディットラインを供与されているが、実際にはそれは使われることなく、二七年五月一四日には満期を迎えている。だから、「アメリカからの借款に頼る

かたちの通貨制度にすぎなかった」というのは事実に反する。実際に借款に頼るのは一九三一年夏のポンド信認恐慌の時であり、米仏から二次にわたり借入しているが、これは焼け石に水であった。

英国の金本位崩壊の過程の説明でも驚くべき認識を示してくれる。筆者は英国の金本位制度の崩壊過程の研究にそれなりに取り組んだつもりであるが、平井のように、英国が金本位制を停止した一九三二年九月において、「九月には再びドイツから発生した危機はイギリスにも押し寄せ」（四九頁）ていると書かれると、自身が不勉強ではないかと不安に陥る。

幸いにも平井のような記述はドイツ金融恐慌や英国のポンド信認恐慌を扱った文献には見当たらない。ドイツの金融恐慌は七月の為替管理導入以降、その対外的波及は封印されているのである。平井の四九頁の記述全般も厳密に検討すれば意味不明な記述が多く、一般の読者は何が書かれているのか理解できないだろう。理解できない読者がその真の理解力のある人と断定して差し支えない。

要するに平井は英国の再建金本位制の成立から崩壊の過程については付け焼き刃にもならない、あやふやな知識しか持ち合わせていないのにケインズの再建金本位制観を語ってしまうのである。せめてキンドルバーガーなどの一般的金融恐慌史くらい読んでおくべきだった。

III とんだ『一般理論』解題

(i) 『一般理論』における名言を台無しにする切断行為

平井の特長は文脈に関連なく、あるいは時代的背景に注意を払わずに、ケインズを引用することにある。ケインズの真意から乖離する解説になることが多い。それは名言番号18に象徴的である。それを以左、引用しておく。

18 「最近の」数理経済学批判（一九三六年）

最近の「数理」経済学のあまりにも多くの部分は、それが立脚している最初の想定と同じように不正確な、単なるつくり事であ「る」（六二頁）

読者も奇異に感じるとおり、「単なるつくり事であ「る」」は実に不自然な文の切り方である。実は平井は勝手に、すぐに続く原文を切り離し、五行もの解題の後で、次のように訳出してしまった。

著者はもったいぶった、訳に立たない記号の迷宮のなかで、ともすれば現実世界の錯綜関係と相互依存関係を見失ってしまうのである（六二頁）

このように一つの文章を切断し、しかも切り離して解題するとケインズの本意は抹殺されてしまう。さらにいえば、訳文もまちがってしまう。そこで次にそれを解説してみよう。そのために以右の、分断された二つの文は原文では一つのセンテンスになっていることを確認し、それに基づいてわかりやすく訳出してみる。

原文

Too large a proportion of recent 'mathematical' economics are merely concoctions, as imprecise as the initial assumptions they rest on, which allow the author to lose sight of the complexities and interdependencies of the real world in a maze of pretentious and unhelpful symbols. (MK.7, p.298)

拙訳

最近の「数理」経済学のあまりにも多くの部分はたんなるつくり事にすぎず、それらが前提としている出発点 (initial) の想定と同様に漠然 (imprecise) としているので、著者はもったいぶった、どうしようもない (unhelpful) 記号の迷路の中に陥り、ともすれば現実世界の錯綜性と相互依存性を見失ってしまうのである

さて読者は平井訳 (実は塩野谷祐一の訳) と拙訳のどちらがケインズの真意を捉えていると考えるだろう。例えば、‘imprecise’を「不正確」と訳してしまうと文意が「漠然」となってしまうことに平井は気がつかない。ケインズのセンテンスを勝手に分断すると肝心のセンスが分断される例。それを平井が自爆テロ的に示してくれる。

(ii) 「壺」をはずした「アニマル・スピリッツ」の惨状―「美人投票」の顛末

名言二三番 (22 美人投票、古い壺、アニマル・スピリッツ) において、平井はケインズの三つの主張を披露してくれるが、最初の二つの場合、ケインズの本意はとうてい伝わらない訳である。その訳に関する解題も目を覆わんばかりの内容である。

まず一つ目のもの。いわゆる「美人投票」のそれである。これは意味としては文意は伝わっているが、一般の読者向けに読みやすく、わかりやすく工夫する必要がある。

平井の訳

………玄人筋の行う投資は、投票者が一〇〇枚の写真のなかから最も容貌の美しい六人を選び、その選択が投票者全体の平均的な好みに最も近かった者に賞品が与えられるという新聞投票に見立てることができよう (六八頁)

原文

.....professional investment may be likened to those newspaper competitions in which the competitors have to pick out the six prettiest faces from a hundred photographs, the prize being awarded to the competitor whose choice most nearly corresponds to the average preferences of the competitors as a whole. (JMK.7, p.156)

筆者ならば次のように単刀直入に意味が伝わりやすい訳にする。

たとえたとすれば玄人の投資は新聞紙上の美人投票だろう。投票者は一〇〇枚の写真の中から最も美しい顔の六人を選び出さなければならないが、それが投票者全体の平均的な好みが一番近ければ賞品をもらえるのである。

案の定、平井はこの箇所に関し意味不明の解題を披露してくれる。ケインズの時代のアメリカでは、「市場心理を予想するという『投機』の過に、資産の予想収益を予想する『企業』が巻き込まれるという事態」（六九頁）が発生したそうである。ここの「企業」は完全なる誤訳である（本稿（下）第IX節（v）参照）。この「企業」は平井も表記しているとおり、*'enterprise'*であり、これは短期投機的投資に対する長期的期待をより安定的に組み立てようとする企業の安定的投資のことをさす。ところが平井は致命的なことに、誤訳で塗り固められた意味不明の塩野谷祐一訳の『一般理論』を鵜呑みにしている。だからケインズによる投機防止策の提案を理解できない。

それが次の文章である。投機が跋扈する「この事態を防止するためのケインズの解決策は、株式市場へのアクセスを高価なものにすることであった」（同、六九頁）。これを読んでも一般読者は一体何のことかわからないだろう。

この点については塩野谷訳の検証のところで論じる（本稿（下）第IX節（vi）参照）。

第二にいく。「古い壺」の話である。

平井の訳と原文を紹介する。

もし大蔵省が古い壺に銀行券を詰め、それを廃炭坑の適当な深さのところへ埋め、次に都会のごみで表面まで一杯にしておき、幾多の試練を経た自由放任の原理に基づいて民間企業にその銀行券を再び掘り出させる………ことにすれば、もはや失業の存在する必要はなくなり、その影響のおかげで、社会の実質所得や資本資産もおそらく現実にあるよりもはるかに大きくなるであろう（六八頁）

If the Treasury were to fill the bottles with bank-notes, bury them at suitable depths in disused coal-mines, which are then filled up to the surface with town rubbish, and leave it to private enterprise on well-tried principles of *laissez-faire* to dig the notes up again (the right to do so being obtained, of course, by tendering for leases of the note-bearing territory), there need be no more unemployment and, with the help of the repercussions, the real income of the community, and its capital wealth also, would probably become a good deal greater than it actually is (JMK.7, p.129, 下線は筆者が付す)

わかりにくい訳であるが、誤訳はないように見える。しかし「………」のところを訳出しないとケインズの本意は引き出せないことに平井は無頓着である。その「………」のところは原文では括弧で括られた箇所であり、便宜上、本稿では下線を付している。その下線部の意味は「もちろん、この土地を掘り出す権利は銀行券を生む土地の借地権の入札に応募することによって得られる」であり、「自由放任」原理の行動を指している。したがって、平井

のように、この原文の括弧部分はずして訳すと実質の意味は伝わらなくなる。

平井が意味をつかみ損ねた原因はどこにあるか。それは文脈における、「自由放任 (*laissez-faire*)」の含意を理解できなかったためである。‘well-tried principles of *laissez-faire*’ (筆者なら「よく吟味された自由放任」と訳す) が同じ頁 (上から四行目) にある ‘the principles of the classical economics’ の別表現であることに平井は気づいていない。その段落でケインズは、ピラミッド建築、地震、そして戦争、などそれ自体、無駄、損失になるものでも、雇用にはよりよい効果があると主張しており、その関連で「古い壺」の話を持ち出しているのである。

だからそれ自体無駄なことでも事業活動を誘発すると雇用にプラスであるというのであり、その意味を踏まえてこそ、「政府が無為無策でいることへの痛烈な批判である」(六九頁)と解説できるのである。何もしないよりは、借金を抱えて公共事業をする方がましというわけである。

ところで、ケインズのその箇所の主張に関し、平井は「ケインズがその後で実際に提示しているものは、住宅建設や美術館建設等であった」(六九頁)という。「その後」が原文の pp.129-31 をさすとすれば、「美術館建設」の記述は見当たらない。ピラミッドや寺院の建設の話はあるが。平井の場合、「美術館」も「古い壺」と一緒に地中深く埋められてしまったのだろうか？

(iii) 「流動性のわな」にはまった「流動性選好」

ではケインズの『一般理論』の訓詁学的解釈に明け暮れることで平井は学者生命をつなげばよいはずであるが、どうもその訓詁学も苦手らしい。ケインズの流動性選好の意味に関し意味不明の説明を平気で行っている。それは名言番号21の流動性のわな (リクイディティ・トラップ (一九三六年) の箇所である。

利子率がある水準まで低下した後では、ほとんどすべての人が、きわめて低い率の利子しか生まない債券を保

有するよりも現金のほうを愛好するという意味において、流動性選好が事実上絶対的となる可能性がある（六六頁）

これは JMK 7, p.207 からの引用であり、それ自身、訳に問題はない。しかしそれに関する解題が何とも奇妙である。ケインズ理論の訓詁学者の面目躍如といったところであり、そこを引用してみよう。

ケインズの理論は、貨幣の需要供給で利子率が決まるとするものである。貨幣需要（つまり流動性選好）は取引動機、予備動機（これらは所得が増えれば増加する）および投機的動機（利子率が上がれば減少する）に分類される。ケインズの理論の特徴は、投機的動機にある。利子率が下がる（債券価格が上がる）につれて、人々は債券よりも貨幣での保有を希望するようになる（とされる（六六頁））。

平井はここで「投機的動機」の説明で大混乱に陥っている。一方では、「投機的動機」は「利子率が上がれば減少する」と書いている。これは逆にいえば、投機的動機は「利子率が下がれば増加する」ということであり、その場合は貨幣でなく債券を保有しなければ投機にならない。貨幣を保有しているだけでは投機はできないはずである。ところがその後、平井は、「ケインズの理論の特徴」として「投機的動き」を挙げているはずなのに、「利子率が下がる」につれて、「人々は債券よりも貨幣での保有を希望する」と書いている。これでは「利子率が下がる」につれて投機家が保有したいのは「債券」なのか「貨幣」なのか、そのどちらなのか読者はわからなくなる。まさにこれこそ、平井版「流動性のわな」といつてさしつかえないだろう。

どうやら平井はケインズ理論の訓詁学でも暗いようだ。ケインズの人物像を明らかにするのに不可欠な彼の生きた時代的背景の読み取りも覚束ないのに、それを補うはずの訓詁学の素養もかなりあやしいのである。

VI とんだマルクス・レーニン評言

(i) ケインズに名を借りた「レーニン主義」の転倒

平井によれば、ケインズは「レーニン主義」を次のとおり捉えている（名言番号34）。

レーニン主義は断固として大胆に非・超自然的であり、その情感的・倫理的本質は、貨幣愛に対する個人および社会の態度を中心としている（八五頁）

しかしこれではケインズが一体何を言いたいのかわからない。だからこれでは「名言」にもならない。原文は以下のとおりである。

Leninism is absolutely, defiantly non-supernatural, and its emotional and ethical essence centres about the individual's and the community's attitude towards the love of money (JMK.9, p.259)

これを名言にするためには以左のような、平易な日本語にしなければならない。

レーニン主義は完全に不敵にも非霊的（唯物主義）であり、その情感的・倫理的本質において主に問題にされているのは個人および社会の貨幣愛への性向である。

このように平易に訳す理由は、ケインズがレーニン主義の社会では資本主義では支配的であった金銭的動機の相対的重要性が変化すると考えている点（JMK.9, pp.259-60）を汲み取る必要があるためである。

平井がケインズのいわゆる、「レーニン主義」を理解できない理由は他にもある。レーニンによる、宗教とビジネ

スの優先順位付けを逆さまにしているからである。それは次の解説に示される。

レーニン主義は、ヨーロッパ人が数世紀のあいだ、魂の別々の場所においてきた……宗教とビジネス……を結合したものである」(八五頁、傍点は平井が付す)

これではレーニンにおける宗教とビジネスの位置づけに関するケインズの本意から完全に遊離する。それを証明すべく、関連する原文を提示する(下線部分が平井の訳)。

Leninism is a combination of two things which Europeans have kept for some centuries in different compartments of the soul—religion and business. We are shocked because the religion is new, and contemptuous because the business, being subordinated to the religion instead of the other way round, is highly inefficient (JMK.9, p.257).

この原文に照らし合わせれば、平井が解説するような、「宗教とビジネス……を結合したものである」ことにならない。平井が単に「結合」と訳している原文の“a combination”は「注目すべき結合」と訳すべきである。それは下線を付していない原文を訳せば、明らかである。ケインズは両者を「結合」させている話しを主題にしているわけでない。「レーニン主義」ではその優先順位が従来と逆転していることに注目しているのである。そこは次のとおり訳出するべきである。

われわれが衝撃を受けるのは、その宗教が新しいからであり、また軽蔑を覚えるのは、宗教がビジネスに従属する代わりに、ビジネスが宗教に従属させられているために、きわめて非効率的になっているからである

この拙訳は便宜上、宮崎義一の訳を借りた。もちろん宮崎のとんでもない誤訳を直したうえのことである。宮崎は宗教とビジネス(Business)の関係を、「事業が、別の回り道を経ることなく宗教に従属せしめられている」(邦訳、三九四頁、ケインズ全集第九巻、東洋経済新報社、一九八一年第一刷り、一九九一年第二刷り)と理解してしまった。なお、細かいことであるが、「霧のカーテン」(三〇三頁訳)は原文(p.256)とは'a belt of fogs'になっているが、正しくは「霧のベルト」だろう。

宗教とビジネスの関係は拙訳のように訳出しないとケインズの本意を捉えたことにならないのであり、名言にもならないのである。

(ii) ケインズに名を借りた『資本論』によるコーラン抹殺

さてレーニンと言えばマルクスがついてくる。そのマルクスに関するケインズの理解に関し、平井は焚書坑儒の暴挙に出る。マルクスに名を借りたコーラン抹殺である。平井はいつからラシュディ気取りになったのだろう。

それは名言番号(51 カール・マルクス)のところである。ここまでケインズの叙述をバラバラに切り離しケインズの真意を葬り去る「ケインズ学者」は世界でも見当たらないだろう。否、これが典型的なケインズ学者なのかもしれない。

これらの本が、どうして世界の半分の地域に火と剣をもたらすことができたのでしょうか。……その今日的経済価値は……ぜ、ぜ、と確信します(一一三頁)

この引用は、引用に先行する記述と「……」の部分をはずすと、ケインズの真意はまったく伝わらなくなる。平井が挙げている部分はケインズのバーナード・ショー宛の書簡(一九三四年一月二日)からのものであるが、

平井はまさかショーばりの冗談を駆使したつもりなのだろうか？

しかし風刺は事実に根ざさなくては効果がなくなる。それがショーの風刺の神髄であるが、今までに取りあげてきた平井の手口からして、ショーばりのウィットを平井に期待すること自体が事実に根ざさない風刺になってしまいうだろう。平井をショーばりの劇場に登場させる寸劇はさておき、そこで原文を挙げておく（下線部分が平井が訳した箇所）。

なお、その前にその書簡においてケインズがマルクスをどのように見ているか、簡単に紹介する。ケインズによれば、マルクスの『資本論』に感じたことはコランに感じたことと同じだという。『資本論』は歴史的に重要であり、多くの人を魅了するものがあることをケインズも承知しているが、しかしそれは退屈で時代遅れの空疎な論争本にすぎない。ケインズは同じ感想をコランにもあてはまる。以左に続き平井が引用する記述が登場するのである。

これらの本のいずれもがどうして世界の半分の地域に火と剣をもたらすことができたのでしょうか。私にはさっぱりわかりません。間違いなく私の理解には幾分欠けるところがあるでしょう。あなたは『資本論』とコランのいずれも本当だと信じますか？それとも『資本論』だけですか？『資本論』の時代環境における価値についてはいずれも、私はその今日の経済価値は（時にたまたま、非建設的で一貫性がないままに迷る洞察力は別にすれば）、ゼロと確信します。もし私がそれを再度読むことがあればもう一度読むことを約束してくれますか？（JMK.28, p.38, 下線部分が平井が訳した箇所）

見られるとおり、下線部分以外のところを訳出しておかないと、下線部分のケインズの真意は抹殺されてしまう。また、下線部分の平井訳の「今日の経済価値」の「経済」は原文ではイタリック体になっており、「経済」というふ

うに強調しておく必要がある。そもそも「火と剣」のたとえは『資本論』が元祖でなく、コーランの教えからのものだろう。そして「これらの本」と平井も訳しているのであれば、「これら」は『資本論』一つだけでは足りないことも明らかであろう。

かくて文脈から外れた、平井のフィルタを通して「名言」を読まされる一般読者は永遠にケインズの真意を味わえなくなる。ここでケインズとバーナード・ショーが登場したのであるから、バーナード・ショーの歴史観の一端を紹介しておくのも一興だろう。彼は「常に時代遅れな歴史」の特質を次のとおり、強調している。

これこそは、子供達が決して現代史を教わらぬ理由なのである。彼らの歴史の教科書は、すでにその時代思想が流行後れになってしまった時代と、もはや現実の生活に応用できなくなった情況とを扱っている。例えば、彼等はワシントンについて歴史を教わるが、レーニンについては嘘を教わる。ワシントンの時代には、子供達はワシントンについて嘘を（同じ嘘を）教わり、クロムウェルについては歴史を教わった（バーナード・ショー一七八頁）。

残念ながら政治的情况が一変したにもかかわらず、バーナード・ショーの警句は二一世紀の本邦ケインズ学者にもピタリと当てはまる。「レーニンについては嘘を教わる」の「レーニン」は平井の場合、「ケインズ」に置き換えられる。平井の引用に典型のとおり、ケインズに関する嘘が止まないものである。それが日本のケインズ学者の情況であろう。彼らはケインズに関し、「常に時代遅れな歴史」の語り部なのである。ハロッドに代表される『ケインズ伝』のような、軽信的なストックはすっかり品切れになっているはずなのに。

ショーはジャンヌ・ダークに名言を語らせる。「獣の単純には大きな智慧があります。本当です、そして、学者の智慧には時々、大きな愚かさがあります」（バーナード・ショー二三七頁）。問題となるのは、獣の肉体を備えた

学者の頭脳をもつか？ 学者の肉体を備えた獣の頭脳を持つかであろう。もちろん、ショーは自身の言葉に大いに自覚している。次の引用が典型的である。

ところで、己より愚かな連中を啓蒙してやれば必ずその恨みを買うという事実は、いつの世にあつても、すぐれた賢者達の理解し得ぬところなのである（バーナード・ショー 一五二頁）。

なおケインズはマルクスの『資本論』をよく読んだ形跡はない。クラウディオ・サルドーニによれば、ケインズはマルクス経済学についてきちんと読んだこともないし、理解もしていなかったはずであるが、『一般理論』でマルクス経済学を辛辣に批判していた（クラウディオ・サルドーニ 七二八頁）。その態度は一九四二年にも維持されており、ケインズはマルクスに関し、「以前はさほど根拠のないまま抱いていた印象、すなわち、彼は独創的で透徹した眼識を持っているが全くもってはなほだ貧弱な思想家であるとの印象」をロビンソンへ伝えている（Moggridge 470）。

V 忘却の彼方と化したケインズの戦後通貨構想

(一) 「流動性のわな」ならぬマウス・トラップにはまった悲劇

平井によるミードとケインズの関係を誤り伝えている。それは名言集の八六番目のところである。そこでは一九四五年一月七日のミードの日記を次のとおり、引用している。これも知ったかぶりをしたことがどれほど大きな代償を伴うのか、その傷ましい例を示してくれる。

86 ジェームズ・ミード―棄船しない唯一のねずみ（一九四三年）

「ケインズ」は非常に上機嫌で、私のことを、「船を棄てない唯一のねずみ」と呼んでいた。そして「リチャード・ホプキンス」は別として、技術的な経済問題进行处理することは能力がまったくない―彼はそういつていた―大蔵省の官僚を痛切に批判していた（一七二頁）

■典拠はどれ？

名言番号86の年代の「一九四三年」は誤記だろう。以右のミードの日記の日付は一九四五年一月七日と書いているのが平井だからである。この日記が編纂された文献も誤記している。平井が典拠としているのは、S. Howson and Moggridge (ed.), *The Wartime Diaries of Lionel Robbins and James Meade*, 1943-45, London, 1990 の「p.26」とされているが、これは同じ編者の S. Howson and Moggridge (ed.) でも、全く別の著書（*The Collected Papers of James Meade*, Vol.IV: *The Cabinet Office Diary* 1944-46, London, 1990, p.26）からのもの。

とすると平井がそれを実際に手にして読んだのかどうかも怪しい。その理由の一つは、この文献が平井の『名言』には参考文献リストにないこと。中身をよく読んでもいない文献も無頓着に参考文献一覧として掲載する平井の手口からしてみても不自然な扱いなのである。

第二の理由。肝心のミードは平井の紹介とまったく逆のことを書いていること。平井の参考文献一覧からはずれているミード全集の問題の第四巻の、一九四五年一月七日の日記（平井が言及）に直続する一月一四日の日記において、ミードは「船を棄てない唯一のねずみ」どころか、ケインズのどうしようもない気質を愛着をもって皮肉っている「ねずみ」になっているのである。

ちなみにケインズは「ねずみ」という言葉を使う場合、「裏切り者」（JMK.25, p.364）として使うこともあることを確認しておく（Moggridge <1992> 727-8, 748）。

■「ミードという「ねずみ」の実像

さてミードの「ねずみ」ぶりを一月一日の日記から明らかにしておこう。一月七日の日記で平井が言及した色盲の「ねずみ」でなく、洞察力のある「ねずみ」としてのミードの意識の流れを追うためである。

ミードのその日の日記によれば、ケインズは大蔵省へ帰る車にミードを乗せ、IMF協定について協議した。それによれば、その先週ケインズは「ひどい文書」(a terrible document)を回状にしたものである。IMF協定に関する米国の解釈は間違っており、自分の解釈が正しいというのである。しかし、ミードの見るところ、ケインズは無力感に陥っていた。そして当日の日記で、ミードはケインズの人となりを鋭く皮肉っている。周知のことが進行するものである。それはケインズの性癖である。賭けてもよいが、ミードに見るところ、ケインズは現在この条文を受け入れるのは反対であるが、一週間もしないうちにころつと態度が変わり、修正なき条文に強く賛成するようになるだろう。

とはいえ、この点についてのミードの予想ははずれている(S. Howson and Mogridge (ed.) ②> 29-30, 33)。一週間もしないうちにケインズがころつと態度を変えることはなかったからであるが、ミードがケインズをそのような性格の人間であると判断していることは象徴的である。ケインズを知る人の多くがケインズとは物事の両極端に揺れ動く人間であると性格付けしているのである。ケインズはそのようなミードのことを、一週間前には「棄船しない唯一のねずみ」と呼んでいた。

思わぬ閑話休題となってしまったが、ここで平井の記述に戻る。平井はミードの日記(一九四五年一月七日)には言及した。しかし同じ文献にある一月一日の日記をみた気配はない。文献の典拠表記も誤記であり、該当する文献も参考文献リストにはない。そして決定的なことは、一月七日と一日の日記におけるミードによるケインズ描写はかなりのコントラストがあることを見過ごしている点である。すなわち、ケインズはミードのことを信頼す

る仲間として形容し、その一週間後、ミードはケインズをおなじみの変節癖の人として描いていることに平井は気がつかない。

そのわけはどこにあるのか？ 単なる不注意からか？ はたして当該文献を実際手にして読んだのかどうかも怪しいとみる筆者の推察もあながち邪推とはいえないのである。邪推であつてほしい。しかしそうなると読んでも何も理解していないことになる。平井にとつていずれの批判も都合悪くなる。

■ケインズの心理描写ができない

しかし以右の点は瑣末なことである。平井がケインズの当時の心理状況を読み過していることに比べれば。それはケインズがIMF協定第八条を誤解釈したために英国政府内部で非常に不利な立場におかれたことにある。その第八条解釈をめぐり、ロバートソンと激しく議論を交わすが、これに完敗する。ロバートソンの解釈が正しいと認めざるを得なかったのである。かの論争好きのケインズである。したがってケインズは一九四四年末から四五年初め、非常に屈辱的な精神状況におかれていたのである。

この点をモグリッジ、スキデルスキーは大部のケインズ伝記で詳述している。悲しいかな、日本のケインズ研究者はこれを読んでも理解できない。しかしそのケインズ学者としての空ろな権威を誇示するために、その二人の名著を典拠に出して読んで理解したかのような体裁をとっていた。しかしそのようなおそ非学問的な取り繕いが何時までも通用するはずがない。

その点について、筆者はこの間、精力的に批評し続けてきた。未だに巷のケインズ学者からの反論はない。しかしながら彼らはそれまでの雄弁な姿勢と異なり、その点については沈黙を決めこむのである。ところがおくれたやつて来た最後のアパッチならぬ、無邪気な平井はそういう点も無頓着なままにケインズの全生涯を語ろうとする。ケ

インズの人生最大のクライマックス（何年にも及ぶ英米金融交渉）を知ることなく。

樂觀的な解釈しかできないケインズの場合、英国がIMFから資金借入権利を失った時には為替自由化を止め、為替管理ができるかと解釈してしまった。経常支払と資金移転に関する交換性義務（第八条第2項）が停止されると勘違いしてしまったのである。英国金融史研究の泰斗プレスネルが、「ケインズ卿による根本的な誤解に基づくものであった」とする所以であった。

ところが、ケインズは悪あがきし続け、問題の条項を書き換えることができることとさえ主張した。法律顧問のベケットは最初はケインズの解釈を支持していたが、一九四五年一月までには草案が悪かったと結論づけた。法律論議でいけば、米国的解釈が勝つに決まっており、その点はケインズ・ロバートソン論争でも決着がついている。そしてケインズの側の人間の多くもそう見ている。ミードもその一人だったのである。だから、ミードは「棄船しない最後のねずみ」どころか、その反対にケインズを皮肉っているのである（一月一四日の日記）。

窮地に陥ったケインズは英国蔵相に働きかけ、米國財務長官モルゲンソーへ手紙を書かせ、IMF協定条文を書き換えないと英国は協定を認めない旨を米國へ伝えるよう進言した。一九四五年一月一〇日の会議でケインズは米國財務長官宛にその旨の手紙を作成するよう指示され、次のような文面の草案を作成した。これがミードのいう、「ひどい文書」の内容と思われるので、引用しておく。爆笑ものの、泣き言に等しい文面だから、何度も引用する価値のある文書である（後の「ブラック・コメディ」（モグリッジ）の原点）。

文書が最終法として性急に準備されてしまい、修正が困難になった時、巧妙なる解釈によって、文面に表れていないことはきわめて明白であり、またはそれに署名した人々が理解せず、承認もしていないような義務を課そうとすることは悪い、危険な前例となってしまうと私は考えますが、あなたはこの考えに賛成しませんか？

(JMK.26, p.158)

■ケインズの「ブラック・コメディ」も知らない「ブラック・コメディ」の役者

ケインズは孤立していたわけである。そのため、ミードと一月七日に長い時間、話す時間があると機嫌がよくなつたとみるのが自然だろう。だから、ミードのことを「棄船しない唯一のねずみ」と呼んだのだろう。そして、大蔵省の人間のことを、「技術的な経済問題を処理することはまったくできない」と、「痛切に批判していた」のである。しかし当のミードは一日の日記にケインズのお粗末さを記している。ケインズこそがIMF協定を理解できない頭脳の持ち主だったからである。

アンダーソン英国蔵相は二月一日付けでモルゲンソーへ手紙を送った。ケインズの先の草案を下敷きにした文面であり(JMK-26, pp.175-7)、第八条第4項では通貨交換義務を免除されるとなっているのに、第2項ではそれが認められない。相対立する項は一つと同じ第八条の中に両立できない。第4項で為替自由化（交換性義務）が免除されるならば、当然第2項でも免除されるはずだというのである。しかし文面から言えば、第2項が第4項に優先することは協定文では明記されている。だから英国「ケインズの言い分は通りようがないのである」。

しかもケインズの対応には「かなりのブラック・コメディ」(Moggridge 753) がつきまとう。二月一日付けのモルゲンソー宛ての手紙に対し、米国側は文書による返答を拒否し、この手紙の抹殺さえ主張した。あえて手紙を受け取るとすれば、何と、日付をずっと後にずらし、内容まで書き換えろと言つて来たのである。どのように？ すなわち、協定条文は急いでドタバタした中で作成されたので欠陥が生じたという内容は削除しろ!!。

ケインズは自身の協定解釈にこだわり続け、四月四日には次のとおり、文書を残している。

この条文の作成に携わった人によってはつきりとは説明されていないことが認められているような問題に関し、条文が明確に意味する範囲を超え、非常に詭弁だらけの、巧妙にうわだけ飾っている内容のものに英国が束縛されることを米国が期待するのは不当であろう

しかし偉大なケインズとて歴史を捏造するわけにいかない。ブレトンウッズ会議終了の際、IMF協定の条文を巧みな修辞で絶賛したのが他ならぬケインズだった。ところが、後になって、この条文を、「非常に詭弁だらけの、巧妙にうわべだけ飾っている内容」だったというわけである（〈米倉二〇〇六〉一二四〜八頁）。

■ケインズの狼狽ぶりを語れない「名言」

以右、一九四五年一月におけるケインズとミードのやりとりの背景を明らかにしてきた。さて平井の記述にこの背景を示唆する内容が読み取れるだろうか？ 一月七日と一四日ではケインズに対するミードの考えは大きなコントラストをなす点に平井の注意が向いていたのであろうか？ 注意が向いていたと考えるのはかなり無理がある。なぜなら、「棄船しない最後のねずみ」の年代を一九四五年でなく、四三年と誤記し、また出典も誤記し、しかも本来の出典も参考文献としてあげていないのであるから、当該文献を読んでいると好意的に考えるわけにいかないのである。しかも相反するミードの二つの記述（一月七日と一四日）は原典では日付上、直結しているのである。そこを見逃しているとする批判はまだ好意的批判である。そもそも原典を読んだのかどうかも不明なのである。いわゆる孫引きの疑いもあるということである。

ロバートソンは第八条2項と第4項の歴史的経緯をケインズに説明している。草案の段階では第4項（スターリング残高問題）が最初で第2項（民間の経常取引）は後になっており、先に回されていた第4項の方が第2項よりも優先される規定となるという風に脚色されてしまった。最終協定に盛られる第2項、第4項の内容の相互の関連について英国と米国、カナダ間で激しい議論の応酬となった。英国は相互関連があり、米国、カナダは関連がないと主張した。英国としては第4項が第2項に優先すると主張するのに対し、米国、カナダは第2項が優先するとい

うわけである。ところが、このように議論が緊迫しているのに、ケインズは加盟国が基金への資金援助の権利を失うと経常勘定における交換性義務（第2項）は自動的に消滅すると考えていたが、ロバートソンはこのような考えには大反対した。二つの条項が関連することはどの教書にも謳われていない。経常取引の義務に関する免除は基金に対する権利が消失する前に基金に相談する話であつたからである（ロバートソン、一九四四年七月一日のメモ）。

こうした中、米国代表（バーンスタイン）は第八条第4項の中へ第2項（a）を制限するものは何もないということ明記した一文を挿入しようと提案した。ロバートソンはこれに反対し、英国側は第2項（a）における交換性義務は第七条の稀少通貨条項と第一四条の過渡期条項、さらには第4項にもとづき免除されることを主張した。加盟国は基金の資金を利用する権限がある時だけ、第2項（a）の義務を守るべきであるというのである。

英米加の議論は紛糾し、カナダ側は、加盟国が基金から資金を引き出す権利を失っている時には第4項（a）は免責されるという規定さえ、取り去ろうとしたので会議は決裂しそうになった。当然だろう。英国はこの第4項における免責条項を守り、さらには第2項の免責も求めていたからである。このため、「にっちもさっちも行かない状況になり、会議はかなり険悪になってきました」（MK.26, p.124）。結局、米国、カナダ側は英国側の主張を認め、同4項自体は撤回しないこととし、英国側のロバートソンも米国側の主張を認め、第4項が第2項における交換性義務を免責できることを明記した文を削除した。重要な処理なので、ロバートソンはケインズの承認を求めようとした。しかし、なかなか連絡がつかないので、大蔵省次官補のイーディを仲介にしてケインズへ連絡をとることになった。間接的ではあるが、ケインズはロバートソンが提起した妥協を受け入れた。問題ははたしてイーディがきちんと仲介役を果たしたのかどうかである。あるいはケインズがイーディの説明をよく理解できていたかどうかである。

■ケインズの見苦しい対応ぶり

ケインズは問題が発覚した後で、責任はロバートソンにあると言い出した。しかしこの問題の所在を指摘したのは他ならぬロバートソンであり、ケインズはロバートソンとの論争において最初の段階では問題の所在さえ把握していなかった。むしろロバートソンが無理解であると批判したのである。そしてロバートソンの主張が正しいと認めざるを得なくなると、条文作成の責任をロバートソンになすりつける。もしロバートソンのような問題があるとなれば、なぜ、ブレトンウッズ会議の終了会議の後になってようやく問題を出したのかというのである。これは典型的な責任逃れである。最高責任者としては実に見苦しい態度である。

問題はケインズ、ロバートソンのどちらが悪かったかということではない。現行の条文でいくと、加盟国が基金から資金を借り入れる権利を失っている場合も、英国は民間、個人に対しポンドを外貨に交換する義務がある。交換性義務を果たす中、外国為替を大量に喪失しても、基金の承認がなければ、交換性を維持しなければならない。挙げ句の果ては通貨主権を奪われたまま外貨準備が枯渇することになる。ロバートソンはこのような重大な可能性につながる条文修正を認めてしまったミスをやんだのである。

■イカロスになったケインズ

ロバートソン自身がミスを認めた。これに最終責任を負うのはケインズであるが、白を切るつもりであるが、それは通じない。この意をうけたのであろうか、ハロッドは『ケインズ伝』において、こういう経緯を全く紹介していない。しかし英国には質の高い歴史研究家が揃っている。プレスネルであり、モグリッジであり、スキデルスキーである。もちろん平井はこれらの権威の主張を何も理解できない。ケインズ・ロバートソン論争のどちらに軍配を上げるか。プレスネルは *IMSO* から出版された大著において、このロバートソンの覚書を非常に聡明な説明である

と評価したのである。

ケインズはかなり動揺した。そのため、見苦しい自己正当化に終始する。一九四四年二月二九日に覚書を関係各位に送り、協定の文面に関し、実に驚くべき言い訳をしている。ミードのいわゆる、「ひどい文書」とはこのことをさすと思われる。

我々の誰もが、清書された、とぎれていない文書のコピーを一通り読み終える機会もないままにもちろん署名をしなくてはなりませんでした。わたしたちがその文書の中でせいぜい読むことができたのは点線のある個所だけでした。わたしたちがなしえる唯一の弁明は、わたしたちのホストである米国はわたしたちが聖餐式も終油の秘蹟をうけることなく、あてのはずれるままに、わたしたちをホテルから数時間以内に放り出すという取り決めをしていたことを知ったということです（JMK:26, p.149）。

重大な失態をした人間は下手な修辞でその場を切り抜けようとする。このケインズの手紙もその例に漏れない。ユダヤ人のホワイトへのあてこすりのつもりなのだろうか、協定の手続きがユダヤ教の「聖餐式も終油の秘蹟」をうけることがなかったという。しかし他ならぬケインズこそが、頭上に水を注ぎ原罪を洗い清める秘蹟を授かり、第八条の正しい解釈の洗礼をうけなおすべきだろう。第八条という聖霊の賜物により堅信に励み、聖餐の儀をへて、英国の通貨主権を剝奪される協定に署名したことに對する心身の苦痛を取り去るべく、終油を授かるべきであった。このようにIMF協定条文作成の場合、英米加では行き詰まる駆け引きが繰り広げられている。カナダのラスミンスキーによると、この協定草案作成に取りかかると、協定はどんどん長くなり、だんだん微妙な解釈の余地を拡大させた（Skidelsky2000>349）。ケインズに随伴していたロビンズも件の七月一日の日記に、「どうしようもないほど複雑」と記しており「英国と米国との相違が……また二度問題にならないようにするために極力警戒し

なければならぬ」(Howson & Moggridge ①> 180) と記している。それくらい、第八条の最終案作成においては英米加の三国間の解釈は錯綜していたのである。

ケインズは、英国の害になる条項に気づかなかったといつてロバートソンを批判した。しかし、ロバートソンはケインズの条項作成に関し承認を得ていたと主張したが、ケインズは自分がそうした記憶はないとさえいつてしまった。これでケインズ、ロバートソンの関係は悪化した。しかし潔いロバートソンは「馬鹿な不注意なミス」の責任を認め、これを「墓場までもつていく」ことにしたのである(『Skidelsky2000』358)。そしてスキデルスキーはブレトンウッズ協議以降の二人の不和が解消することはなかったと紹介している。

さて平井はスキデルスキーのこの解説をどのように理解するのだろうか？ ケインズとロバートソンの二人の関係を正反対に描くハロッド、カーンに与しているようである。しかしその代償は大きい。そうしてしまうとケインズ全集もケインズ伝記の大家のモグリッジ、スキデルスキーも読んでいないことになる。これでケインズ研究家として学問の世界で通用するのだろうか？

どうやら、ケインズの研究を極めようとする平井には超えるべき、多くの壁があるようだ。その壁は九州の名城、熊本城の「武者返し」の石垣のように、上に行けば行くほど急傾斜となり、平井にはとても上れない。下手をするとなんと真つ逆さまに落下する。

「武者返し」、あるいは「バカの壁」ならぬ「ケインズ学者の壁」を制覇するためには平井の学問的資質が問われているわけである。問題ははたして平井がその壁を意識できているかどうかである。筆者が邪推するところ、意識もされていないのではないか？

（ii）銀行原理も理解できないまま清算同盟案を解題

■「ケインズ学者」の在庫処理

平井はケインズが得意としていた先物取引を理解していない（92 投機―行為と分析）。これは次の節で詳論するとして、この節ではケインズの戦後通貨構想の断片さえ理解できないケインズ・ハザードぶりを紹介する。それは名言番号28、27に端的に示される。平井は金融経済に暗いのにケインズを雄弁に語ろうとする。

28 「コモド・コントロール」―国際緩衝在庫案（一九四二年）（七八頁）。

平井の訳文はケインズが何を言いたいのか何も理解していないことは原文と対照させれば、直ちに判明する。

平井訳

競争システムは、大きな需要と小さな需要の時期を平均化させることができる緩衝在庫の存在を、それが負の収益を引き起こすがゆえに―自然が真空を嫌うのと同じように―反射的に嫌う（「原材料の国際コントロール」一九四二年四月）（七八頁）

原文

The competitive system abhors the existence of buffer stocks which might average periods of high and low demand, with as strong a reflex as nature abhors a vacuum, because such stocks yield a *negative* return in terms of themselves. (JMK.7, p.127)

原文と照らし合わせた意味の通じる訳を以左に示す。先物取引と在庫膨張、縮小の関係がわかる日本語にしないとケインズの意図は伝わらないのである。

空気が真空を反射的に非常に忌み嫌うことと同様、競争システムは需要が膨らむ時期と萎む時期を均すことができる緩衝在庫の存在を反射的に非常に忌み嫌う。なぜなら、そのような在庫の場合、在庫を緩衝させることに關して言えば、収益はマイナスになるからである。

このように訳する理由を説明しよう。緩衝在庫制度があると商品価格が急騰するときには緩衝在庫の吐き出しで価格上昇が抑えられてしまうので、競争システムにおける商品信用買い投機は水を差される。反対に商品価格が急落する場合、さらなる下落を見越して商品信用売り投機が弾みがつくはずであるが、緩衝在庫により商品買い支えが起こり、信用売り投機が挫かれる。だからこそ在庫緩衝制度は競争システムに嫌われるというわけである。高く売れる時に安く売り、安く買えるときに高く買う。だからそういう取引をすれば収益はマイナスになる。それが緩衝在庫制度である。自然に真空があつては困るように、投機など競争システムにあつては困る存在なのである。

結局、平井には‘such stocks yield a *negative* return in terms of themselves’の文が何を意味するのか不明だったようである。あるいは‘high and low demand’も在庫需要に絡ませて訳するセンスも持ち合わせていないようである。

■清算同盟を知らないと清算に追い込まれる

この在庫緩衝制度が理解できない、もっと大きな理由がある。ケインズはこの制度とかの有名な清算同盟案と連動させようとしている(JMK.7, pp.121-9)。ところが次に示すとおり、平井は清算同盟案が一体何であるのか実は何も理解していない。だから当然ながら、これと連動する在庫緩衝制度も理解されない。では清算同盟案に関する平井の無理解ぶりを解説してみよう。平井によるとケインズは清算同盟案を次のように説明している。

27 ケインズ案とホワイト案（一九四二年）

このような清算同盟の基礎にある発想は単純なものである。すなわち、いかなる封鎖体系のなかでも実施されているような銀行業の原理を一般化したものである（七六頁）

これを読んでも一般の読者は清算同盟がなぜ「銀行業の原理を一般化した」ものなのか理解できるはずがない。平井はこのことに無頓着なまま、清算同盟案は、「国内業務では当たり前になっていることを国際的な舞台に拡張しようとしたもの」（七六頁）と解説している。では一体何が「当たり前」のことなのか？

もちろんケインズは平井のいわゆる「銀行業の原理」を「銀行原理」として言及している。ケインズは平井が挙げる「名言」に直続する箇所で、「この銀行原理においては貸方と借方は必ず一致する」と書いている（JMK:25, p. 171）。これを付け加えると「銀行業の原理」は理解できない。このような「当たり前」のことをなぜか平井は削除している。

理由は簡単である。平井は銀行原理の何たるかを理解できないのである。先に緩衝在庫装置のところでも明らかにしたとおり、平井は経済学における金融論には非常に暗い。しかし金融を理解しないでケインズを語るのは非常に危険なことである。

■清算同盟のおさらい

そこで啓蒙活動といこう。国際決済上、輸出国の債権は輸入国の債務に等しい。これがケインズによれば銀行原理となる。債権と債務が同額になるからである。清算同盟案においてケインズはこの点を強調しているわけである。額面上、ケインズ案は黒字国と赤字国、あるいは債権国と債務国のいずれにも責任を負わせるようにしている。

他国全体に対して受取超過になっている国（具体的には米国）は清算同盟に貸方記帳し、支払超過の国が借方記帳する。記帳された通貨単位はバンコールと呼ばれる。この受取、支払の超過額が無限に累積しないよう、債権国は貸方記帳を未使用のままにしてはならない。過度の貸方残高は他方の過度の借方残高の累積を意味するので、この残高の不均衡を債権国、債務国がいわば共同責任で解消させていくというのである。

しかしこれは額面どおりに読めない。戦争終了当初、戦争に巻き込まれた国は戦後復興で輸出どころでない。戦勝国といっても戦火を免れている米国だけが世界に輸出する能力がある。米国以外の加盟国は米国から一方的に輸入に頼らざるを得ないので、清算同盟案における借方は割当額を大幅に超過する。他方、貸方の国となるのは実質米国だけである。このため、借方、貸方の超過の調整の負担はひとえに米国にかかってしまう。これもケインズのいわゆる「銀行原理」となる。

他の国は輸出能力、あるいは競争力がないので、米国はここから輸入するわけにいかない。すると手持ちのバンコールを援助に使う以外にない。他国はただで米国から輸入するに等しくなる。これが平井が一知半解に使っている、「信用創造の創出」（七六頁）のことである。

米国は不均衡を回避するためには米国は自国通貨ドルのバンコール価値を高めざるを得ない（ドル切上げに等しい）。あるいは他国からの輸入を促進させるために不用の品を輸入したり、自国物価を高くしたり、関税・輸入制限を緩和しなくてはならず、それでも貸方が減らなければ国際開発貸付を行わなくてはならない。借方、貸方の双方の国の負担となるはずの清算同盟において米国は一方的に負担を押し付けられる。だからこそ米国はケインズ案を葬ったのである（『落日の肖像』三〇～三二頁）。

このような簡単な解説も平井には及びもつかないようだ。なぜなら、自身が書いていることもわかっていないからである。たとえば清算同盟案においては、「外国為替市場は理論上なくなる」（七六頁）と、それ自体重要な指摘

をしてくれる。しかし次の頁では、ケインズはIMF協定調印後も、「中央銀行間の公的決済に固執した」（七七頁とする）理由には何も問題がない。

それは銀行原理と清算同盟案の核心が何もわかっていないからである。それを端的に示すのが次の平井の記述である。

国際取引の金融的舞台は清算同盟に集中することになるが、財・サービスなどの国際取引は民間企業の自由な活動に委ねられている。ケインズは、この案を、国内銀行業務では当たり前になっていることを国際的な舞台に拡張しようとしたもの、と特徴づけている（七七頁）

■ 銀行原理と清算同盟の関係

すでに指摘のとおり、「この案」がなぜ、「国内銀行業務では当たり前になっている」のか、読者も銀行関係者も理解することはできない。さらに問題なのはケインズの意図をつかんでいないことである。ケインズは清算同盟案では「国際取引の金融的舞台は清算同盟に集中する」のであり、したがって、平井の解説とは正反対に、「財・サービスなどの国際取引は民間企業の自由な活動」に委ねるわけにはいかないと考えていた。だからこそ、いみじくも平井が書いているとおり、ケインズはIMF協定調印後も「中央銀行間の公的決済に固執した」のである。

もちろん、平井の場合、「中央銀行間の公的決済に固執した」というケインズの意図を理解する文献読解力はない。そのようなケインズの「固執」がIMF協定第八条における大変な誤解釈につながり、英国政府の立場を困難にしてしまったという重大な事実がある。ケインズが為替自由化の条項のはずの第八条を為替管理の条項という逆立ちした解釈に陥った状況はケインズ全集第26巻に詳細に伝えられている（これはケインズ・ロバートソン論争に集約されるのであるが、もちろん平井はこれに五里霧中）。このような重大な事実に関し、平井は何も言及できない

ま、ケインズの戦後通貨構想を解題してしまった。

その点は日本経済新聞記者の方が平井よりはるかに理解が深い。同紙は拙著に関し、「英代表として通貨政策で自国の権益を守りきれなかったブレトンウッズ会議での彼の対応やその後の言動など、豊富な事例を列挙。これまでは違うケインズのもう一つの姿を描き出している」(二〇〇六年三月二六日)。同紙はケインズが同協定を誤解釈した点に注目しているからである。

歴史は繰り返す。日経記者の理解にも及ばなかったのは平井ばかりでない。東大教授・吉川洋も轡を並べる(「米倉二〇〇七」一六六頁)。

もちろん理解力のある研究者は筆者の主張を首肯している。たとえば牧野裕は、ブレトンウッズ会議において、「ケインズ卿がIMF協定第8条の理解でひどい錯誤に陥り、この取返しのつかないこの政策のミスの取繕いに腐心していた、という驚くべき事実が明らかにされている」(「牧野」一三八頁)と指摘している。これは拙著『落日の肖像—ケインズ』の内容を指してのことである。

ケインズが戦後の英国経済を為替管理で乗り切ろうとしていた事情の考察を欠いてしまうとケインズの戦後通貨構想は何も理解できなくなる。彼は「大英帝国圏の経済利益を保持しようとしていた。一方、戦後にはこの経済圏を解体しようとしたのが米国である。第二次大戦は表面上は連合国と枢軸国の闘いである。しかし裏面では英米の経済戦争であることを忘れてはならない。大英帝国圏の存亡をめぐる闘いだったのである。それが集中的に表れるのが英米相互援助協定第七条をめぐる英米のぶつかり合いである」。

■相互援助協定の中身ぐらい知ってほしい

米国は英国の対ドイツ戦争のためにレンド・リース(武器貸与法…一九四一年三月)を実施する時に見返りを求

めていた。この中身は明記されていなかったが、「大統領が満足できるもの」でなくてはならず、当然、貿易上の差別処置の撤廃が含意された。具体的に言えば、大英帝国圏内の対外貿易差別処置全般の撤廃である。一九四二年二月二三日に英米間で相互援助協定が結ばれ、その第七条では、「国際貿易におけるあらゆる形態の差別処置」を撤廃することが明記されていた。これは英国にとってトロイの木馬となるものである。

さて平井はこれをどのように解説してくれているのだろう。それは「名言26 帝国の存亡―英米相互援助協定第七条（一九四一年）」（七四頁）の解題を見るとよい。平井は同七条案をめぐるケインズの見解を次のように訳出している。

われわれ自身ならびに自治領にとって満足のいく新しい協定―帝国特惠を原則的に廃止することなく、しかし価値ある譲歩を見返りにして……、実際には帝国特惠の範囲を徐々に減少するような―を考案することは可能である（七四頁）

このような訳文ではケインズの真意は正確に伝わらない。また、同協定の年代（一九四二年）を「一九四一年」に誤記している。もし「一九四一年」にこだわるとすれば、「英米相互援助協定第七条（一九四一年）」のところを「第七条案」としておけばよい。平井は同協定について、「一九四二年二月締結」（七四頁）と書いており、あるいは付録の年表において同時期に『英米相互援助協定成立』（註）と書いているはずである。そして平井が引用しているケインズの文書は一九四一年八月二八日付けのものである。したがって引用部分は協定文（一九四二年）ではなく、草案の段階（一九四一年）の話をしているのである。

さてこのような細かい問題はさておき、問題の引用文の訳である。原文は次のとおりである。平井が「……」

としているところは実は原文にはない。それまでの平井版「名言」紹介の場合、肝心の部分が「……」として削除される傾向が多々見られたが、今回は逆に不用な箇所「……」が付されている。

It should be possible to work out new arrangements as satisfactory to the Dominions as to ourselves, which might gradually abate the extent of the Imperial Preferences in practice without abandoning them in principle, but only in return for valuable concessions. (JMK.23, pp.203-4)

この原文は次のように訳出するのが妥当だろう。

帝国特惠を原則上 (in principle)、廃止することなく帝国特惠の範囲を實際上 (in practice) は徐々に縮めることになるかもしれない、われわれ自身ならびに自治領にとって満足のいく新しい協定を考案できるのは、価値ある譲歩を見返りがある場合だけである (七四頁)

「原則上」(in principle) と「實際上」(in practice) をメリハリをつけて強調する文意を浮かび上がらせる工夫をしないとケインズの真意は摘出できないだろう。

以右の引用のとおり、ケインズはどちらかといえば、相互援助協定第七条を容認する立場にあった。しかし、この第七条案の内容に関しては英国側には激しい抵抗があった。その点を考慮した形で右のケインズ文書は訳出されるべきだろう。

すでに四二年二月一二日にチャーチル首相はこの協定へ同意の姿勢を示していたが、その最後の時まで、大蔵省次官のホプキンスは帝国特惠を守ろうと奔走し、また第七条に関する明確なコミットメントを「ヴィクトリア朝の『自由貿易』」に限定しようと試みた。しかしこのホプキンス草案はチャーチルに無視された。

なぜだろう？ それは大蔵省のほかの人間の見解が反映されていたためである。その人間はケインズである。無条件に第七条を受け入れることにより、英国が「戦後直後にある程度の金融的自立性を保持する」機会を確保しておきたいという期待がケインズにあった。後の英米関係の展開を見るかぎり、ケインズの対米交渉の樂觀的態度の淵源の一つがここにあった（JMK.23, pp.225-8, 一九四二年二月二日の覚書。協定が成立しない時の打撃を懸念したのである。ケインズは以前の場合、レンド・リース協定の締結を一番懸念していたはずである。一九四二年になると、ケインズは第七条が帝国特惠を廃止するのを求めるものでないと理解してしまった。このような理解を米国が共有するはずがないにもかかわらず（へ米倉二〇〇六◇ 一三五〜六頁）。

結局、平井はケインズが生きた激動の時代に合わせてケインズを考察できなかった。深刻なことにこの平井が日本のケインズ学者の第一人者の一人なのである。

（iii）かき消されてしまったケインズ・ロバートソン論争の佳境

■「蛇」と「おまじない」と「犬」の三位一体

平井は名言75においてケインズがロバートソンのことを「脱皮しない、よい蛇」と揶揄していることを紹介している（二五四頁）。これはケインズの『一般理論』のことをロバートソンが「マンボジャンボ」（munbo-jumbo）と批評したことに関連している（JMK.13, p.503, 一九三五年二月二〇日）。「マンボジャンボ」とは無意味なおまじないという意味であり、もったいぶった言葉で議論の相手を惑わしたり、論点をぼかすことをさす。

ケインズはこれに激怒し、『一般理論』が公刊されるまで絶交している。もちろんケインズのこと、激しい修辭で意趣返しする。ロバートソンのことを、ケンブリッジ学派の子宮の中に逃げ込んで出ようともしないと批判してい

る〔落日の肖像〕一四四（六頁）。強烈な名言、修辭を投げつけるとすれば、「蛇」よりも「子宮」と使った方が有効だろう。

修辭の選択の趣味の問題はさておき、平井は『一般理論』公刊以降、「両者の理論的懸隔は拡大を見せることになった」（二五五頁）と解説しているが、はたしてそうなのか？

実は大きな紆余曲折がある。その点、スキデルスキーは「ケインズとロバートソンは完全には和解できなかった。それはブレトンウッズ協議の後の議論に見てとれる」（Skidelsky 2000: 556）と記している。

その点を解説しておく。『一般理論』をめぐる両者は激しく論争を交わし、気まづい関係になったが、ブレトンウッズ協議の時は違う。ロバートソンは献身的にケインズを支えた。ケインズは同協議、あるいはIMF協定作成におけるロバートソンの仕事ぶりを絶賛しているのである。それはハロッドの『ケインズ伝』にも書かれている。

問題となるのは「ブレトンウッズ協議の後の議論」である。IMF協定作成に携わっていたロバートソンは同協定第八条の文面が英国にとって非常にまずい内容になっていることに気がつき、その処理をめぐり、ケインズに相談した時期からである。

ケインズはロバートソンの解釈の方がまちがっていると反論した。ケインズは両者を「骨」（第八条文面のこと）を食い合った「二匹の犬」にたとえ、自身満々に論争に臨んだが、尻尾を卷いた「犬」がケインズだった。そしてロバートソンはケインズの対応を「ダニ」呼ばわりし、しかしこれにケインズは何の反論もできなかった。かの論争好きのケインズである。そして見苦しいことに、責任は協定作成にかかわったロバートソンにあると批判する一方、協定文はデタラメであるといい、さらにその改竄を秘密裏に米国側に求める、およそ信じがたい失態を犯したのである。協定の最終案の確認を求めたロバートソンにゴー・サインを出したのは他ならぬケインズだったはずであり、また協定調印直後、ロバートソンを絶賛し、あるいは協定文の文面をほめていたのもケインズだった。

平井がしばしば言及するロビンズも、ロバートソンとケインズの言い分を聞き、前者の方が正しいと婉曲に判定している（『米倉二〇〇六』一〇四～六頁）。その点をミードは承知しているのである。そして潔いロバートソンはケインズの見苦しい対応については口外せず、「墓場」まで持って行くことにしたのである。これにつけいったのがハロッド、カーンであり、ケインズとロバートソンの関係がIMF協定解釈以降まづくなってしまうことを決して語ろうとしない。ロバートソンがケインズに勝っていたことを決して認めたくないからである。

■ケインズとロバートソンの関係くらい知っておくべきこと

だからこそ、スキデルスキーは「ケインズとロバートソンは完全には和解できなかった。それはブレトンウッズ協議の後の議論に見てとれる」と書いたのである。そしてスキデルスキー、モグリッジは大部のケインズ伝において、この両者の論争を大きく取りあげている。ハロッド、カーンなどケインズの取り巻きたちがひた隠している問題をである。どうやら平井もケインズと同様、尻尾を巻いた「犬」になったようだ。

なお、筆者はケインズとロバートソンのIMF協定解釈をめぐる論争では後者に軍配を上げるのはもちろんのことであるが、修辭の効果でも後者に軍配を上げておく。ゲーテ研究でも有名なロバートソンは『ファウスト』におけるメフィストの台詞（「もらった馬は、わざわざ口をあけて見るまでもない」）を援用して、ケインズをからかっている。馬を売り買いする場合、口をあけてチェックしてみるが、贈り物の馬はわざわざ歯並をみるまでもない。この「贈り物の馬」が八条作成におけるケインズの同意というのである。これはケインズ・ロバートソン論争を締めくくる名文なので引用しておく。

貴方の同意が贈り物の馬としてやってくるまでにその他の多くの厄介な問題がありました。しかし、その馬が本当に元気かどうか、馬の口の中をしつかり調べておくべきでした（JMK.26, p.160）

こうして尻尾を巻いて逃げた「犬」は「贈り物の馬」扱いされたのである。「脱皮しない、よい蛇」への見事な意趣返しといえよう。ところがこのようなケインズ・ロバートソン論争の醍醐味は平井には何のことやら見当もつかなかった。

VI 猛威をふるうケインズ・ハザード

— 玄人投資家ケインズの手口を理解できない「投機家」の登場

■ 通貨先物取引のおさらい

平井は先物取引のイロハを知らない(92 投機—行為と分析、一八二頁)。だから通貨の先物取引に熱心だったケインズの取引の手口を解説できない。日本におけるケインズ研究の第一人者の一人とみなされる人物の学問的理解はその程度なのである。もちろん善良なる読者は筆者の主張をにわかには信じられないだろう。そこで平井によるケインズ理解の程度をやさしく解説してみよう。

ケインズは一九二〇年四月、五月頃、通貨の先物取引の相場の読みが外れ、大損を抱えてしまった。その時、さらに先物取引を継続しようとして金融業者かつ慈善家のアーネスト・カッセルに手紙を書き(一九二〇年五月二六日)、投資資金を借りようとしている。その時の手紙の内容を平井は次のとおり、訳出している。肝心な箇所はすべて誤訳である(下線部分が誤訳)

外国為替市場の現在の混乱状況は、私の判断では、投機の絶好の機会を提供しています。……………私の提案は次のとおりです—①マルクとリラをあなたに代わって先物で売り、私の判断で取引を閉じる……………ことを私にお認めいただきたい、ということですよ……………

私はこのビジネスに充分に習熟しており、秘訣を知っています。……②私は、現在よりも高い価値でのこれらの外貨の弱気筋であったため、現在の価格では、資金の底をついてしまっており、私自身は、いかなる資本もリスクにおける状況にはありません。（二八二頁、JMK.12, pp.7-8, ○番号は筆者が付す）

この手紙を受け取ったカッセルが、平井の日本語のような内容を読んで理解できたとしたら、金融詐欺にひっかりやすい人物になるだろう。もちろん、カッセルは金融取引に詳しいので、平井訳のようなケインズの手紙では、ケインズの意図を理解することはないだろう。

平井はケインズの『貨幣改革論』では「先物為替をめぐる先駆的な理論が提示されている」（二八二頁）と解説している。とすれば、ケインズの先物取引の「先駆的な」内容に精通しているはずである。実際はその対極にある。平井が先物取引を何も理解していないことは先の引用の架線部分の訳出に示される。まず①の箇所である。実は「……」の所を訳出していないから意味が通らないのである。原文は次のとおりである。

you authorise me to *sell* marks, fances and *lire forward* on your behalf and to close the transactions at my discretion, subject to your overruling instruction at any time. I would keep you informed daily as to the position.

意味のとおり訳は次のとおりである。

マルクとリラをあなたのために信用売りし（先物売り）、私が適当と判断するときに、それを買戻し信用取引を決済することをお認めください（先物売りは反対取引の買いで決済されること）。しかし、何時いかなる場合も、私の判断よりもあなた自身の指示の方を優先させます。ですから私はあなたに毎日、信用取引の状況をお

知らせします（括弧の部分は筆者の解説）。

平井の訳と拙訳を比較すれば一目瞭然のことは何か？ 強調すべきは、平井は“close”の意味を理解していないということ。これを理解してしないと先物取引は説明できなくなるのである。“close”は先物取引を、売りなら買い、買いなら売りという反対取引による決済を意味するのであり、平井のように、「取引を閉じる」としたら意味不明になる。

■投機を勝手に“speculate”してはいけない

この先物取引のイロハを理解していないので、平井はさらに②でとんでもない誤訳の罠に陥ってしまった。

「私は、現在よりも高い価値でもこれらの外貨の弱気筋であったため、現在の価格では、資金の底をついてしまっており」の訳でわかる読者がいたとしたらその人は文盲である。平井はこの程度のケインズ理解で、長年ケインズ経済学を教えてきたのである。これに誰も不信の念を抱かなかったのだろうか？

原文と対照させれば、このような平井の意味不明な訳、すなわち、「私は、現在よりも高い価値でもこれらの外貨の弱気筋であった」は、世にも奇怪な珍訳として語り継がれるであろう。

この珍訳の文も入っている原文は次のとおりである。

I am not in any position to risk any capital myself, for the reason that I was a bear of these currencies at higher values than now current and have, at present prices, quite exhausted my resources (JMK.12, p. 7).

これを意味の通る日本語に訳しておこう。

私はこれらの通貨を先物売りする信用売り取引（a bear）を手がけていたのですが、現在の相場よりも高い値段で取引を始めてしまったので（したがって信用売りよりも買い戻し価格の方が高く、したがって売買差額はマイナスになり、しかも証拠金の10倍の信用取引を行っているので損失も10倍に膨れあがる）、現在の相場で評価してみると、私の資金は完全にふっとんでいます。ですから私自身は自分で資本を先物取引に思い切って賭ける状況にないのです（括弧はケインズ全集原典を読んで筆者が付した解題）。

結局のところ、平井は通貨の信用取引（本文の場合、通貨の先物売りとその反対取引の買い戻し）のイロハを何も知らないまま、そして知ったかぶりをして、投機家ケインズを描こうとしてしまい、読者を迷路に引き入れてしまった。原著者のケインズもいい迷惑である。まさしくケインズ・ハザードである。

英語の基本単語もよく勉強しておくことである。そうすれば、“risk”という動詞の意味も理解できたはずである。この“risk”の動詞の意味を知らないから、平井は②に直結する原文の意味も取り違えてしまっている。そこで、直結する平井の訳文と原文を参照させておく。

平井の訳文

……私は、この状況を利用することができないという点で、私自身のまずい管理に対しみじめな思いです。そしてそれゆえ、あなたの助けが私にとって最大の助けになる今、あなたにお願いする次第です（一八三頁）。

原文

But the prospects for anyone who comes in at the present low shake-out level are very good. I am

miserable at my own bad management in not being able to take advantages of the situation and hence apply to you at a moment when your aid would be of the greatest help to me (JMK.12, p.8)

これを“risk”の意味が生かせる、日本語で意味の通じる訳に直しておく。実は平井が「……」としてすませている箇所が重要なのである。

しかし現在の、暴落して低くなっている水準で取引を始める人にとってはいい情勢です。しかし私自身はそれまでのやり方がまずかったので（絶好の投機に賭けるお金が手元にないこと）みじめです。したがって、あなたの援助が非常に大きな助けになる時にあなたにお願いする次第です。

周知のとおり、ケインズとは『説得論集』の著者である。そのケインズを研究している平井は『説得論集』の著者の雄弁な説得力を台無しにする訳に終った。これもまさにケインズ・ハザードである。

■ケインズの関連文献も読まない杜撰な理解

平井がさらけ出した問題には根深いものがある。平井はケインズ学者としての資質が問われているからである。普通の学者ならば、自身がケインズ全集の該当箇所を読んでよくわからない場合、周辺の関連文献を読んで内容を確かめるはずである。平井はその初歩的作業を怠っている。しかも悪質なことに、賢しらに、投機家ケインズを紹介する。

平井の躓きを質す方法は簡単である。モグリッジの『ケインズ伝』（1992）、及びスキデルスキの同年の『ケインズ伝』の関連箇所を読むことである。しかしそれらのケインズ研究の権威を読まない日本のケインズ研究の権

威。それが平井の実態なのである。

モグリッジは投機家ケインズを紹介した自著の章に実に気の利いたタイトルを付している（Chap.14 Adjustments to a way of life, 〈Mogridge〉348-367。なお〈Skridelsky1992〉38-46も参考になる）。ケインズが先物取引で破産しかかり、しかし起死回生の成果をあげる経緯を暗示している。平井がその章におけるケインズの先物取引の顛末の所（〈Mogridge〉349-50）を読んでおれば、既出のような奇怪千万な訳にならなくてすんだはずである。モグリッジはケインズによる通貨投機を簡潔に紹介している。それによりながら、一覧表を提示しておく。

ポンドの対マルク、フラン、リラ相場

取引通貨	日時	対マルク	対フラン	対リラ
	一九二〇年四月末	一二二〇マルク	六四・五〇フラン	八七リラ
	一九二〇年五月二六日	一二七マルク	四八フラン	六三リラ
	一九二〇年末	二六〇マルク	五七・〇五フラン	一〇二・五〇リラ

（出典）〈Mogridge〉350, footnote C から作成。

ケインズの通貨先物取引の苦境はこの表で一目でわかる。マルクを例にすれば、一九二〇年四月末は対ポンド二二〇マルクだったが、ケインズがカッセルに手紙を出した日には一二七マルクに上昇しており、マルクが下がると読んでいたケインズにとって大変な事態になっていた。しかし、ケインズは当日の相場は市場の実態からかけ離れた名目的なものにすぎないという的確な判断をしており、いずれマルク、フラン、リラは下がると予想したのである（JMK.12, p.7）。

とはいえ、当日の相場の評価においては、ケインズ自身は信用取引で大損しており、通貨投機に賭ける金がない。

しかし絶好の投資機会（三つの通貨を先物売りする）が目の前に転がっている。だからカッセルに先物取引の資金を工面するよう依頼したのである。

表のとおり、二〇年末の相場はケインズの読みがピタリと当たったことを示している。大損から大もうけになったのである。この点について、モグリッジは実地的確なケインズ分析をしている。「ケインズはこれらの通貨に関し、長期的傾向に関する見方は正しかったのであるが、短期的に見ると持ちこたえることはできなかった」（Keynes had been right about the long-term trends in these currencies but could not survive the short run 〈Moggridge〉 350）。二〇年五月末の話と同年末の話を比較しているのである。

■日本の「ケインズ学者」の実態の一面

しかし平井は該当箇所のケインズ全集もモグリッジも参照していない。権威を読まない権威主義者。それが平井の実態である。

だから①、②のとおり、ちんぷんかんぷんの訳を読者に垂訓してしまった。自身の研究能力に自覚のない人間の哀切なのだろう。平井はこのような先物取引などの解説について、「ケインズ並びにその周辺の状況を知ってもらうべく、できるだけわかりやすく、簡潔にしかしある、レベルを保ちつつ書くことに努めた。高校生や大学生諸君、それにサラリーマン諸氏が念頭におかれている」（「はじめに」、Ⅴ）だそうである。その結果が今回紹介した水準である。平井の「ある、レベル」は意味深なものがあるようだ。高い金を払って平井の本を買った読者はいい迷惑である。そして日本の学界にも大きな損失である。投機家ケインズをろくに知らない人間が『ケインズ 100の名言』を出版していることである。

なお、“bear”を「弱気筋」として訳出するのは問題がある。ケインズの心理を描写できないからである。これに

ついては同じく、モグリッジの解説を借りる。

もしケインズが「弱気」になり、狼狽していたとしたならば、先の五月二六日にカッセルに投機資金の工面を依頼するはずがないと解説しているのがモグリッジなのである（Moggridge 350）。したがって、ケインズは「弱気」どころか、「強気」なのである。だからこそ自身の金はすっからかんになつても、カッセルの金を借りて、「強気」に通貨先物売りに賭け、そして大成功をおさめるのである。これこそ、‘animal spirits’の持ち主、ケインズの真骨頂だろう。

しかし字句だけでしか英語タームを理解できないのが日本のケインズ学者の大半のようだ。平井など日本のケインズ学者は意味もわからずに、“bear”のことを「弱気筋」と訳しているが、これは金融の本場、英国では正反対の説明になっている。その例を引用しておこう。

“bear”：投機家のことであり、価格が下落すると予想する株を売るが、売った時点には受け渡す株は保有しておらず、将来、その株を売った価格よりも安く買い戻して利益を出して決済する投機家

この引用は F.E. Perry, *The Elements of Banking* (2nd ed.) Methuen, London, 1977, p.388) からのものである。ちなみにこの本は英国銀行協会推薦となっており、英国ではよく読まれていたはずである。

その反対に、“bull”：投機家のことであり、価格が上昇すると予想する株を買うが、買った時点には株購入代金を支払うつもりはなく、将来その株を買い値よりも高く売って決済を済ませ利益を出そうとする投機家のことと解説されている。

この問題はケインズが従事した“bear”にも応用できる。その場合、“bear”の対象は株でなく、通貨である。これを「弱気筋」と訳すと意味が通らなくなるのである。“bear”、“bull”のいずれもリスクを厭わず、少ない資金で大

きな取引を手がける「強気筋」の投機家なのである。

こういう初歩的金融チームも理解できない輩がケインズ学者を気取り、投機取引の天才ケインズを語る。「ブラック・コメディ」。この気の利いたワンフレーズの原案者はモグリッジである（拙著、『落日の肖像』）。これとは異なる脈絡であるが、平井による投機家ケインズの解説も「ブラック・コメディ」のタイトルが相応しいであろう。もちろん平井のこと、モグリッジのいわゆる、「ブラック・コメディ」が何をさすのかさっぱり見当もつかない。このフレーズこそが、ケインズの人生のクライマックスの有様を理解する場合のキーワードであるはずなのであるが。

VII 一〇〇番目の「名言」を飾るに相応しい「終焉」

―迷言に始まり迷言に終わった『ケインズ 100の名言』

平井の名言番号の最後（100 終焉）もケインズ読みのケインズ知らずの解題に終わっている。その意味で、現時点の本邦ケインズ学の到達点を測る格好の指標である。

100 終焉 （一九四六年）

そしてその意味のすべてはだね、心配するな、いつも神の正義があるってことだよ（一九六頁）

平井はこの一文をケインズの言葉として紹介しているが正確ではない。それは Skidelsky の原著を読めば一目瞭然である。原文を確認しておく。

And the meaning of it all is: don't worry, there is always divine justice (<Skidelsky2000> 471)

この場合の「*は*」はトーマス・パーネルの詩の書かれた著作の初版本のことであり、ケインズはそれがどのようなものであるかを説明しようとし、以右の原文のような言葉で説明を終えたのである。その意味するところが、「心配するな、いつも神の正義があるってこと」なのである。これはケインズの言葉でなく、ケインズによるパーネルの要約なのである。だから訳する場合は、次のとおり、意味の通る日本語にしておく必要がある。

パーネルの詩そのものが意味することはだね。心配するな、いつも神の正義があるってことだよ

■気の利いた名言の気の利かない解題

この言葉の原典は、スキデルスキーによれば、Keynes Paper: PP/45, Florence Keynes, 'In Memoriam' からのものである（〈Skidelsky2000〉540, note 47 以下）。ここにおける平井の記述には首をかしげざるを得ない。パーネルの詩についてケインズが言及したことを紹介している同じ頁においてスキデルスキーは、ケインズの死の状況に関するハロッドの描写（モグリッジのそれも基本的にハロッドと同じ）よりもクライブ・ベルによる描写の方が適切であると判断している。このスキデルスキーの頁を典拠としているにもかかわらず平井はハロッドの記述だけしか引用していない（一九七頁）。

■ケインズの最期の表情とは？

クライブ・ベルによるケインズの最後の描写はハロッドとは正反対なのである。ところが平井はそれを注記扱いにもしていない。重要な箇所なのでクライブを引用しておこう。

メイナードはまったく突然死んでしまった。リディアは朝の一〇時にケインズにお茶を持って行った…彼は苦痛で顔をしかめ、憔悴しきっていた（〈Skidelsky2000〉471, 四月二三日の手紙）

一方、ハロッドによればケインズの死顔は「美しい平穏な表情がたたえられていた」(二九七頁)。リディアとケインズの母はケインズが死んだ時、その場におり、スキデルスキーはクライブ・ベルの描写の方を信頼できると判断している。致命的な発作に何度もおそわれていたケインズにまたまた急な発作が起きた後、死顔が「平穏な表情がたたえられていた」というのは無理があるだろう。ハロッド一流の過剰なまでの修辭法記述が災いしているようだ。このような事情からスキデルスキーはクライブの記述の方を採ったのである。にもかかわらずケインズの死の床の描写について、平井はクライブのそれを無視し、ハロッドのそれだけを引用している。

これは平井自身の解説を裏切ることにもなる。クライブ・ベルは、平井の教えるところによれば、ブルームズベリーの仲間の中でもケインズと特に親しく、他のメンバーを姓で呼ぶときもクライブだけは名で呼ぶほどの間柄であつた(一四四〜五、一六四〜五頁)。スキデルスキーがハロッドよりもクライブの描写を重んじる所以だろう。

すでに『一般理論』の箇所における「壺」の解題にも示されるとおり、平井は肝心の「壺」をはずすのが得意技だつた。そのため、ケインズ最後の場面におけるリディアの言動も見逃すばかりか、ケインズとリディアのほほえましいやりとりにも何も言及できない『名言』しか書けないようである。「壺」はずしの「名言」ならぬ迷言に終始しているのである。

スキデルスキーは大部のケインズ伝において、リディアがケインズの死について記している文を、第三章(『The Light is Gone』)のエピローグにしている。簡潔であるが、感銘深い表現なので、下手な訳で台無しにならないよう、原文を引いておく。

And now I am so utterly alone without him. The light is gone. I grieve and weep (〈Skidelsky2000〉478)

■ケインズにまつわる名言は他にたくさんあるはず

最愛の人に先立たれた者の気持ちに余計な解説はいらない。だからスキデルスキーも何もコメントしていない。ケインズの名言をしたためる場合は、そしてそれを非常に面白くするためには、ミードが回顧しており、「ケインズの機知、苛立ち、無礼さと性急な不用意さがぎっしり多量に詰まっていた」名言を選び出すべきだろう（Cited <Mogridge> 835）。

それを筆者は平井に代わって、リディア・ロポコヴァに関するケインズの名言を『拙著』から、紹介しておく。一九二五年八月四日、リディアはケインズと結婚しているが、同年四月、英国は金本位制の復帰を遂げており、その年に新本位の金婚式が執り行われたことになる。金本位と結婚が合体したからである。

平井の記するとおり（二八七頁）、リディアは知識人グループのブルームズベリーからは疎まれていた。それについて気になっていたのだろう、一九二六年一月一八日、リディアはケインズに、手紙を書いている（「私が学識のない女であり、将来も決してそうなることはないことがあなたにとって悲しくないのですか」）。これに対し、ケインズは即日、返事している。筆者の好きな、いかにもケインズらしい手紙である。

悲しむことはない。特に、学識のある女性になることはない。あなたの愛しいメイナローッカ（メイナードとリディア・ロポコワの合成語）。

リディアはこれに大いに元気づけられたはずだ。リディアはバレリーナのスターであることを誇りに思っており、ペトルーシユカで主演を演じることになったときにケインズへ宛てた時の手紙は絶品である。

これで私はあなたの語学試験の首席第一級合格者になれるはずだ

実にほほえましい二人の手紙のやりとりである。こういう良質なもののこそ、『名言』に加えてしかるべきであるが、無粋な平井は「機知、苛立ち、無礼さと性急な不用意さ」(ミード)のぎっちり詰まっているケインズの肝心の名言を引き出せない。

このような二人の関係を終焉させるケインズの死。リディアの悲しみは凡庸な表現では尽くしきれないものがある。だから筆者はリディアの思いを原文で再度、引いておく。

And now I am so utterly alone without him. The light is gone. I grieve and weep (〈Skidelsky2000〉478)

以右のような二人のやりとりを紹介したのがモグリッジ、スキデルスキーのケインズ伝なのである。筆者はそれを活用してケインズとリディアの関係について紹介しておいた(米倉二〇〇六、二二九～三二頁)。

さて読者は平井の『ケインズ 100の名言』と拙著の『落日の肖像―ケインズ』を読んでどちらが名言集として面白く読めるのか、読み比べてみてほしい。権威の文献を渉猟している著書と権威の文献も読まずに権威気取りしている著書の差が一目瞭然とするはずである。ちなみに筆者は新著、『ドル危機の封印―グリーンズパン』(イブシロン出版企画、二〇〇七年)の第八章に「グリーンズパン名言抄録」というタイトルを付けている。名言の選択には結構、工夫しているのである。

■「100の名言」の「天路歷程」のイバラの道

なお余談になるが、ウィットに欠ける平井のこと、ケインズの遺灰の処理に関する顛末も紹介してくれていない。ケインズは四月二四日、ブライトンに火葬された。遺灰はテイルトン近郊の、リディアとよく散策したダウンスの丘陵地帯に撒かれた。ケインズは遺言で、遺灰をキングス・カレッジの地下聖堂におくよう指示していたはずであ

るが、末弟のジョフレイはその遺言のことを忘れ、ダウنزズに撒いてしまった。その息子のリチャードによると、父親は「あまり実直な遺言執行人ではなかった」。数十年後、リディアの遺灰もケインズと同じくダウنزズに撒かれた（Moggridge 836）。ケインズの遺言も果たされなかったわけであるが、リディアと同じ丘陵地帯が二人の終の住処となっているわけである。幸せな二人であるといつてよいだろう。

さてここようやく平井の『1000の名言』をめぐる天路歷程の旅を終えることにする。平井が引用しているバニヤンの一節を借りるとすれば、この一〇〇番目の名言が実は迷言に終わったことを指摘される平井は「ここへ到着するまでに受けたあらゆる苦しみを悔いませぬ」という心情を抱くことになる。

ただ平井の魂は救われないようだ。平井は迷言ならぬ『1000の名言』のむすびの言葉として、「本書では、ケインズを様々な角度からとらえることで、彼の人間性、業績などを立体的に描くことに努めてきた。本書から、彼の活動と影響力がいかに大きなものであったのかが、明らかになったものと思う」（一九七頁）と書いている。手の施しようのない無自覚ぶりである。いくら強弁しようとも、ケインズの人生のクライマックス（英米金融交渉への関わり）を何ら明らかにすることはできなかったのであるから、自身のむすびの言葉はかなりの割引率を適用しなくてはならないのである。

ちなみに、ケインズの英米金融交渉への関わりについては、日経新聞の書評の方が平井よりも、よく理解している。繰り返しになるが、日経は拙著（米倉二〇〇六）に関し、好意的に書評している。すなわち、「英代表として通貨政策で自国の権益を守りきれなかったブレトンウッズ会議での彼の対応やその後の言動など、豊富な実例を列挙」して、「彼の負の側面をあぶり出す」、そして、「これまでとは違う、ケインズのもう一つの側面を描き出している」（日経、二〇〇六年三月二六日）。

さて平井は拙著で書かれていたようなケインズの「これまでとは違う」、「もう一つの側面」を『100の名言』の中で言及したことがあるだろうか？ 皆無と言ってよい。それは名言番号86におけるミードとケインズの関係の無理解にも端的に示されていた。

平井も悪書が良書を駆逐する、現代版グreshamの法則という、アカデミックハザードに犯されているようだ。第二次大戦勃発から戦争終了、そして死の直前までのIMF・世界銀行開設会議参加までのケインズ、英米金融交渉の紆余曲折に何ら言及もできない。そして仮に言及した場合でも、ちんぷんかんぷんな解題しかできない（特に名言番号26、27、28）。これどうして経済理論家、あるいは経済政策担当者としてのケインズを描けるというのであろう。ケインズの人生のクライマックスを何も知らずにケインズを語る。それがケインズ学者、平井の実像である。

■「ケインズ学者」のケインズ・ランチのソースのまずさ

バーナード・シヨーはトロツキーのことを「パンフレットの王者」と称している。ケインズも負けていない。ケインズも「パンフレットの王様」だろう。そのケインズがトロツキーを引用している。「ねこ用のシチューには野ウサギのソースが必要だというのと同じように、空想的な感情の激発という調味料が必要である」(JMK.9, p.255)。両者のレトリックには、鋼のように、しなりの利いた鋭い切れ味があり、迸る靈感を武器にして論敵を一撃のもとに粉砕する力がある。ロシア革命とケインズ革命という立場の違いはあれ、二人の革命児は共鳴しあっていたようだ。だからこそ歴史的名言を数多く残しているのである。

もちろんこの「ソース」にはバーナード・シヨーの脚注が必要となる。「各種のソースをかけられた真実は我々の咽喉につかえている。ソースをかけずに食べぬ限り、真実は決して腑に落ちないであろう。」(バーナード・シヨー

一七八頁)。

さて今回、平井の料理(ケインズ・ランチ)のソースの味はいかなものだったのか。ソースのかけ違いなのであろう、「名言」が迷言に変わってしまった。読者の腑の落ち具合が気にかかるところである。

しかしケインズ理解に関し、平井だけを批判することは酷な話であろう。平井には救われる途がある。ケインズに関し多くの著書を出している伊東光晴、浅野栄一などのケインズ学者は彼らの年齢からいっても矯正の見込みはないだろう。しかし平井はまだ年齢の限界を克服できる現状にある。方法はひとつ。拙著(米倉二〇〇六)をきちんと読み、それに関して学問的批評を試みることだろう。

それではケインズ学者の沽券にかかわるというのであれば、せめてモグリッジ、スキデルスキーの浩瀚なケインズ伝くらい、きちんと読んでおくことであろう。下手な細工は控えるべきである。ケインズ関連の重大な文献を読んでもいいのに、読んだふりをしたことも明白なことである。今回の『100の名言』で。

参考文献

- S. Howson and Moggridge (ed.) ①, *The Wartime Diaries of Lionel Robbins and James Meade, 1943-45*, London, 1990
—— ②, *The Collected Papers of James Meade, Vol.IV: The Cabinet Office Diary 1944-46*, London, 1990
J.M. Keynes, *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, Managing Editors, Sir Austin Robinson and Donald Moggridge, London: Macmillan (本々ではCWと略記し巻番号を付す).
IV *A Tract on Monetary Reform*, 1971
VI *A Treatise on Money, I The Applied Theory of Money*, 1971
VII *The General Theory of Employment, Interest and Money*, 1973
IX *Essays in Persuasion*, 1972

- XII Economic Articles and Correspondence: Investment and Editorial, 1983
- XIII *The General Theory and After: Part I, Preparations*, 1973
- XXIII *Activities 1940-3: External War Finance*, 1978
- XXIV *Activities 1944-6: The Transition to Peace*, 1979
- XXV *Activities 1940-4: Shaping the Post-War World - The Clearing Union*, 1980
- XXVI *Activities 1944-6: Shaping the Post-War World - Bretton Woods and Reparations*, 1980
- XXVII *Activities 1944-6: Shaping the Post-War World - Employment and Commodities*, 1980
- XXVIII *Social, Political and Literary Writings*, 1982
- 牧野裕「ブレトンウッズ体制」上川孝夫・矢後和彦編『新・国際金融テキスト2 国際金融史』有斐閣、二〇〇七年、第四章、所収
- D.E. Moggridge, *Maynard Keynes - An economist's biography*, London & New York, 1992
- 西部邁『ケインズ』イブシロン出版企画、二〇〇五年（復刻版）
- L. Robbins, *Autobiography of an Economist*, London, 1971
- F.E. Perry, *The Elements of Banking* (2nd ed.) Methuen, London, 1977
- バーナード・シヨー『聖女ジャンヌ・ダーク』福田恆存・松原正訳、主婦の友社、ノーベル文学全集20、一九七二年
- クラウディオ・サルトリニ「ケインズとマルクス」in G.C. Harcourt and R.A. Riach (ed.), *A Second Edition of the General Theory* Vol.1&2, Routledge 1997, 宇沢弘文（序）小山庄三（訳）『一般理論―第二版』多賀書店、2005年、36章、所収
- R. Skidelsky, *John Maynard Keynes - The Economist as Saviour 1920-1937*, Vol.II, London, 1992
- *John Maynard Keynes - Fighting for Britain 1937-1946*, Vol.III, Macmillan, London, 2000
- 米倉茂「ケインズ・ロバートソン論争の現代的波紋―二匹の犬のどちらが首尾よく『骨』をくわえ、どちらが尻尾を捲いたのか？」『佐賀大学経済論集』第三八巻第二号、二〇〇五年七月
- 『落日の肖像―ケインズ』イブシロン出版企画、二〇〇六年
- 「日本のケインズ学への晩鐘―東京大学・吉川洋による拙著、『落日の肖像―ケインズ』の書評への覚書」『佐賀大学経済論集』第三九巻第六号、二〇〇七年三月